波風

藤岡陽子

光文社

波風

藤岡陽子

光文社

波風（なみかぜ）

二〇一四年七月二十日　初版一刷発行

著　者＊藤岡陽子（ふじおかようこ）
発行者＊鈴木広和
発行所＊株式会社　光文社
〒一一二―八〇一一
東京都文京区音羽一―一六―六
電話　編　集　部　〇三（五三九五）八一七四
書籍販売部　〇三（五三九五）八一一六
業　務　部　〇三（五三九五）八一二五

組　版＊萩原印刷
印刷所＊慶昌堂印刷
製本所＊ナショナル製本

落丁・乱丁本は業務部へご連絡くだされば、お取り替えいたします。

JCOPY
〈㈳出版者著作権管理機構　委託出版物〉
本書の無断複写複製（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書をコピーされる場合は、そのつど事前に、㈳出版者著作権管理機構（電話：〇三―三五一三―六九六九　e-mail：info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。

本書の電子化は私的使用に限り、著作権法上認められています。ただし代行業者等の第三者による電子データ化及び電子書籍化は、いかなる場合も認められておりません。

© Yōko Fujioka 2014　ISBN978-4-334-92956-5　Printed in Japan

目次

波風　5
鬼灯（ほおずき）　49
月夜のディナー　79
テンの手　105
結い言（ゆごん）　179
真昼の月　197
デンジソウ　237

波風

藤岡陽子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀　大久保伸子
装画　agoera

目次

波風　5
鬼灯（ほおずき）　49
月夜のディナー　79
テンの手　105
結い言（ゆごん）　179
真昼の月　197
デンジソウ　237

波

風

久保山医院の前に散り積もった桜の花びらを箒で集めていると、
「カ、ト、モ」
と呼ぶ声が背中から聞こえてきた。加藤朋子という自分の名前を、そんなふうに短縮する人はひとりしかいない。振り向くと、桜の樹にもたれかかるような姿勢で、田畑美樹が笑いながら立っている。
「美樹？」
私は目の前に現れた友人の姿に、年甲斐もなく大きな声を出し、手に持っていた柄の短い箒をポロリと地面に落とした。
「漫画みたいなひとコマだね」
美樹は笑うと、
「仕事が終わるの待っててていい？　カトモに頼みごとがあるのよ。最初で最後、一生に一度きりの私からの頼みごと」
と歩み寄ってくる。美樹は看護学校時代からの腐れ縁で、前に会ったのは私の送別会だから、かれこれ五年になるだろうか。それなのになんの遠慮もなく、昨日の続きみたいに話しかけてくる。その感じがなんとも彼女らしい。

「どうしたの突然。そんなたいそうな頼みごとなんて、何がなんでも断りたいよ」
唖然としている私の代わりに、美樹がちりとりに溜まった花びらをビニール袋に入れていく。枯れた茶とピンクが混じる花びらが、彼女の白い手によって瞬く間に小さく集められた。
「じゃ、仕事終わったら携帯に連絡ちょうだい。番号変わってないから。私はてきとうにこの辺を散歩してるわ」
美樹は私の質問に答えないまま袋の口をしばり、意味深な笑みを口元に浮かべて片手を上げる。その笑顔につられるように頷(うなず)くと、彼女は白のトレンチコートの裾を風で膨らませて、桜並木を歩いて行った。

これからどこかへ出掛けるのも面倒なので、夕食は私の家で宅配のピザを注文することにした。私が暮らす賃貸マンションは、久保山医院の目の前にある停留所からバスに乗って、十五分ほど走ったところにある。職場に近いことと、大きなスーパーが歩いて一分のところにあるという理由だけで決めた、なんの取り柄もないありきたりの住まいだ。
「本当にどうしたの？　頼みたいことって何？」
玄関のドアを開けて入るなり、私は美樹に詰め寄った。彼女は犬がふんふんと匂いを嗅ぐように顔を動かして、部屋の様子を窺っている。
「まあまあ。慌(あわ)てない、慌てない」
「だって驚くよ。連絡もなく訪ねてきて、何かあったのかなって」
美樹は看護学校を卒業してからずっと、同じ系列の大学病院の手術部に所属している。今年で三十四歳になるから、勤続年数でいうと、もう十三年になるのだろうか。私は大学病院を五年前

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に退職した後、久保山医院に再就職し、今はカルテの日付が変わるぐらいで、さしたる変化もない毎日を送っている。
電話でピザの注文をしている間、美樹はバッグから取り出したタブレットをテーブルに置いて熱心に操作していた。年を経ても変わらない彼女の美しい横顔に目を向けつつ、既婚者の彼とはまだ続いているのだろうかと思う。
「そうそう、そういえば今日の明け方に最低なオペがあってね。午前四時頃、緊急で」
注文をすませてテーブルにつくと、美樹が切り出した。オペの話よりも、彼女が訪ねてきた理由が知りたくてたまらないのに、ついついペースに巻き込まれていく。
「最低なオペって？」
「今日は平和な当直だったわ、と感慨に耽りながら休憩室でカップラーメン食べてたら、膀胱が破裂した中年男が救急車で運ばれてきたのよ」
「膀胱破裂？」
「そう。なんだよぉって感じでしょ？　膀胱破裂するまでオシッコ我慢すんなよぉって」
美樹は下腹部に手を当てながら苦笑いする。
「その中年男がいよいよストレッチャーに乗せられて手術室に運ばれるって時にね、男の妻らしき女が病院に駆けつけて来て絶叫したのよ。『あんたなんか死んじゃえばいいのよぉー』って。周りにいた人間はそりゃもう呆然よ。手術棟に響き渡るくらいの大声なんだもん。でもね、絶叫の理由を後で知って、なるほどと思ったわよ。……なんだと思う？」
美樹がニヤニヤしながら訊いてきたので、私は「さあ」と首を傾げた。
「どこかのホテルでそういうプレーをしてたらしいのよ」

「プレーって？」
「オシッコ我慢するのが快感、ってやつ。それで破裂しちゃったんだって。そりゃ妻も怒るわよね。夫がばかなことして、しかも夜明け前に病院に呼び出されて。あたしもね、膀胱のオペに付きながら、なんかとてつもなく虚しくなってきたわよ。長年この仕事やってるけど、昨夜はワースト3に入る夜勤だったわ」
肉体の疲労と精神の摩耗でいっきに気分が落ち込んだのだと美樹は舌打ちをしながら笑った。
そして、ひとしきり笑った後、表情を冷たく硬くし、
「小林師長、亡くなったの」
と呟いた。
「昨日お葬式だったの。病院近くの増上寺で」
美樹が自分の手元を見つめるようにして、小さな声を出す。
「うそ……」
「ほんとよ。あたし、夜勤の前にお葬式に出てきたの。看護学校の先生もほとんど全員が来てた」
「小林師長って、小林優子先生のことだよね」
仕事柄、人の死には慣れているつもりなのに、のどが詰まり声が掠れた。
「うん、優子先生」
手元に落としていた視線を私の顔に戻して、美樹はため息をつく。小林先生は手術部の師長で、過去には私たちの看護学校の教員でもあった。病院に長く勤めた後、看護教員として教鞭を取っていたのだが、やっぱり現場が好きだからと再び病院に戻った人だった。

「なんで？　だってまだお若いでしょ」
「若く見えても、この春で五十六だったのよ。今年の二月に入って体調が悪いからって休んでたんだけど、さほど重病とは思ってなかったの、みんな。二週間ほど前の花見には、テレビ電話で話もしたしね。胃癌だったの」
　見舞いに行った時、美樹にだけ自分がもう末期であることを教えてくれたのだという。他の人には黙っていてほしいと口止めされ、誰にも話せなかったのだと。
「小林先生、そんなに悪くなるまでどうして放っておいたのかな？　自覚症状あったでしょう」
「胃癌の自覚症状って、ただの疲労と似たところがあるじゃない。小林師長のことだから無理してたんじゃないかな……もともと我慢強い人だから」
　ほとんど人を褒めない美樹が、唯一尊敬していたのが小林師長だった。相手が教授であろうと助教授であろうと、言うべきことははっきりと口にする人で、未熟な技術で執刀している医師がいれば、「手術室は練習場じゃないですよ」と啖呵を切り、「あなたには無理だから別の先生に代わってください」と叱り飛ばした。誰に対しても容赦のない彼女の存在は煙たがられもしたが、私たちが知る限り、小林師長がついたオペに事故はなかった。
　過酷な業務のせいか、手術部に配属になった看護師の多くは異動を希望し、心身の弱い者は退職すらしていく。そんな中で、十年以上も手術部一筋でやっている美樹や小林師長といった看護師は希有な存在で、同じ場所に長く留まる者同士の信頼や連帯感が互いにあったに違いない。
「昨日がお葬式だったなんて、全然知らなかった。言ってくれればよかったのに」
「いいのよ。式に出ても小林師長と話せるわけじゃないんだし」
　美樹がわざと明るい声を出す。冷蔵庫の中のビールがなくなったので、私は置き場所がなくて

本棚の隙間に立てて保存していた泡盛の瓶を持ち出し、テーブルの上に置いた。
「偉大な先輩への弔い酒ってことで」
美樹はグラスを持ち上げ、私も頷く。

「カトモぉ。あたしさ、いろいろ考えちゃったよ。さすがに」
アルコール度数の高い泡盛を、ビールと同じペースで飲み続ける美樹が、酔っ払いの口調になってくる。もともと酒に強い方ではなく、彼女が酔いつぶれる様をこれまでに何度となく見てきたが、今日は黙認するつもりでグラスに泡盛を注ぎ足した。
「いろいろ考えてさ、考えて考えて、一つだけ考えがまとまったのよ。それはね、死ぬ時には後悔したくないってことよ。そのためには自分を抑えて生きるばかりじゃだめなのかなって」
美樹はそこまで言うと、突然立ち上がり「コンタクト外してくる」と洗面所の方へ向かった。気分が悪くなったのだろう。トイレのドアを開ける音がする。私はトイレの流水音を聞きながら、小林師長と最後に飲んだ夜のことを思い出した。大学病院を退職する時、美樹が主催してくれた送別会に小林師長も顔を出してくれた夜のことだ。
仲のいい看護師が数人集まり、新橋の焼き鳥屋でたらふく飲み食いした後、路地をいくつか曲がって迷路の行き止まりのような場所にある寂れたスナックの二階を借り切って歌った。みんな仕事帰りだったり、日勤を終えてからいったん家で休んで出て来てくれたりと疲労しきっているはずなのに、階下の客から苦情が出るほどの大声で店内に昭和ソングを響かせた。
生きていくことが甘くないことを十分に知っているくせに、先のことはわからないという無茶な若者のように振る舞っていた。自分たちがいなければ、病院の看護組織は成り立たないという

自負と裏腹に、実際の仕事のキツさの中でやめどきを窺っている。自分の生き方を肯定する思いと否定する思いのやじろべえは、日替わりでその重心を左右どちらかに片寄らせた。そうしたひりひりした思いを抱えた同僚たちの中で、小林師長はその夜もただ静かに座り、いつものようにすべてを受け止めたような笑みを浮かべていた。

「柔軟にやりなさいね。幸せの形に合わせて、自分の形も変えられるように。加藤さんはそういう生き方をしなさいよ」

会もお開きになる頃、たしか小林師長はそんな言葉で送り出してくれた。あの時はまさか、それが最後の会話になるなんて思ってもいなかった。

「あたし、やめようかな、病院」

トイレから戻ってきて幾分正気を取り戻した美樹は、グラスの中の氷を奥歯で噛み砕いていた。

「小林師長がいなくなったら、オペ室も変わっちゃうだろうし」

「もったいないじゃん。ここまで頑張ってきたのに」

「頑張ってきたからやめるの。エイズにB型、C型肝炎、梅毒に結核……患者の感染症に、いつ自分もうつるかわかんないのに毎月三十万そこそこの給料で働いてさぁ。休日には勉強会に駆り出され、残業代なんかもまったくつかず、それでもやってこられたのは気概みたいなのがあったわけだけど、それももう限界かも」

瓶に残る泡盛の最後の一滴まで飲み干すために、瓶の底をぺちぺちと叩きながら美樹が呟く。

「あたし、このまま頑張り続けることが怖くなったみたい。仕事も恋愛もいったん終わりにしたいって切実に思うの」

「仕事っていうのはわかるけど、恋愛まで、なんで？　彼と何かあったの？」

私は、美樹の恋人の顔を思い浮かべる。彼女がつき合っているその人は、呼吸器外科の次期教授と噂される医師で、仕事においても人間関係においても如才なく、その立ち振る舞いが紙芝居のページを引き抜くように、場の空気を一変させるような人だった。美樹が魅かれる気持ちはわかるが、自分なんかは足がすくんでしまい、まともに目も見られないタイプの人種だ。

「小林師長が亡くなった時、彼がなんて言ったと思う？　あんなに頑張る必要なんてなかったのにな、だって。あたしね、彼のその言葉を聞いて、悔しかったの。悔しくて、悲しくなった。だって小林師長は頑張るしかなかったじゃないの？　師長を頑張らせてたのは、周りのみんなじゃない？　それをそんな……。彼がひどく冷酷な人間に思えた。というか、冷酷な人間だってこと、ようやく認める気になったのかもしれない」

テーブルの上に両方の肘を立て、美樹が掌で頬を支える。

ひと回りも年上の、妻子のある男を好きになって関係を持ち、もう十年という歳月が過ぎてしまった。自分はこれまで相手に何も求めずにやってきた。好きという気持ちや一緒にいられることが何より重要だと考え、彼にとって居心地のいい場所であり続けた。彼の妻は何年も前から自分たちの関係に気づいているし、気づいていて無関心を装っている。妻は夫と揉めることも、離婚することも望んではいなかった。だからこそ自分たちはこんなにも長くつき合ってこられたのだが、今となってはそれが良かったのかどうかわからないと、美樹は力のない声を出す。

「決して穏やかな十年ではなかったのよ。私も、きっと彼の妻も。それなりに苦しくて、それなりに頑張ってきたんだと思う。何も求めていないようなふりをしてきただけ」

自分がこれまでいろんなことを我慢してきたのは、彼のことを思いやってのことなのか、ただ臆病なだけなのか、はたまたその両方か、それはよくわからない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com